

助成研究題目：北海道とスクリーン・ツーリズム ―中国映画『非誠勿擾』の事例研究―

卒業論文題目：北海道とスクリーン・ツーリズム ―中国映画『非誠勿擾』の事例研究―

卒業論文について

本論文では、スクリーン・ツーリズムの実態を明らかにし、中国映画『非誠勿擾』(2008)を事例にとり、スクリーン・ツーリズムの将来性を考察した。私は『非誠勿擾』のロケ地である北海道・釧路でスクリーン・ツーリズムの根幹である、ロケ地誘致活動への取り組みについて3人の方にインタビュー調査を行った。その結果、スクリーン・ツーリズムの効果は絶大であるということを実感しながらも、その根本である、ロケ地誘致活動に積極的に取り組めていない現状があることがわかった。その原因は大きく分けて3つあった。

1つ目は、経済的問題である。ロケ地誘致活動によりロケ地はロケハンの消費による収入を得ることができるというメリットがある。しかし、実際はロケハンの宿泊費をロケ地に負担するよう要求する制作会社が多い。これではスクリーン・ツーリズムに期待する効果を得られない。

2つ目は、地域本来の魅力の不明瞭化である。つまり、ロケ地誘致活動に目を向けすぎると、無理が生じてしまい、本来の地域の良さが無くなってしまうということだ。よそから持ってきた、あるいは無理やり作品のコンセプトに合ったイメージを植え付けると、地域に馴染まずに終わってしまうことがある。

それよりは、今ある地域本来の魅力さをさらに高めることが重要であるという考え方があ。魅力的な地域づくりをしていれば、自然とロケ地のオファーが来るのだ。本来の地域の魅力を評価し、それに結び付いてロケ地となれば地域活性化も経済的効果も期待できるというものであった。

3つ目は作品がヒットするかわからない不確実性である。スクリーン・ツーリズムは成功すると効果は絶大であるが、その作品がヒットするかは誰も予測することができない。ロケ地として有名になったとしても、それが一時的なものになってしまうかもしれない。『非誠勿擾』のようなスクリーン・ツーリズムの成功を期待することはリスクが大きい。

このようにスクリーン・ツーリズムの根本であるロケ地誘致活動において、地域は積極的には取り組めておらず、まずはこの現状に着目する必要があると感じた。

卒業論文を書き終えて

私はインタビュー以前、ロケ地誘致活動は、知名度も上がり、大きな経済的効果を期待できるから積極的に推進するべきだと思っていました。しかし、実際にはロケ地誘致には様々なリスクや問題があり、地域としては全面的に推し進めることができない現状があります。まずは地域が抱える問題に目を向けることが大切なのだと思いました。この論文を書くにあたって後押ししてくださった、故川上宏先生とご遺族の皆さまにとっても感謝しております。本当にありがとうございました。